



## 図書館とねことゆうれいと

レベッカ・ステッド/作

ウェンディ・マス/作

(偕成社)

93・ス

物語部門

町の広場に突然現れた「青空ミニ図書館」。ミニ図書館に並んでいたのは、今はない「マーチンビル図書館」の本で、すべての本が1999年11月5日に返却されたものだった。なぜ、20年以上も前に原因不明の火事で焼けてなくなってしまったマーチンビル図書館の本が出てきたのか。小学5年生のエヴァンは、持ち帰った本の中にあった貸出カードに残されていた名前とポラロイド写真を手がかりに、ミニ図書館にまつわるミステリーを解こうと調べ始める。



## ぼくのいうことを、きかないぼく

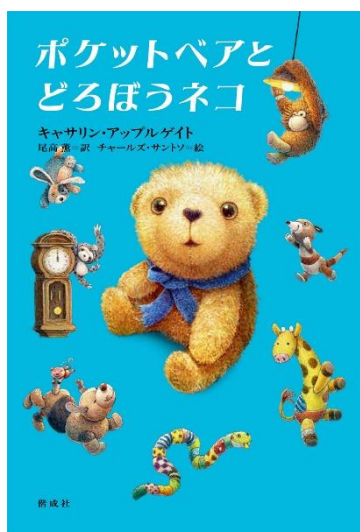
柴野 理奈子/作

(ポプラ社)

91・シ

物語部門

小学6年生の駿<sup>しゅん</sup>は、体が勝手に動いたり、声が出てしまう症状に悩んでいた。駿は、学習発表会でワタルと幼なじみの遥斗<sup>はると</sup>と同じ班になる。遥斗は駿といっしょに過ごすうち、駿の理解できない行動の原因は「トゥレット症」という病気が関係していることに気づく。遥斗は駿の力になりたいと思うが、駿は自分の気持ちをうまく話すことができない。ワタルと遥斗は、思いどおりにならない体に苦しむ駿のために、何かできることはないか考える。

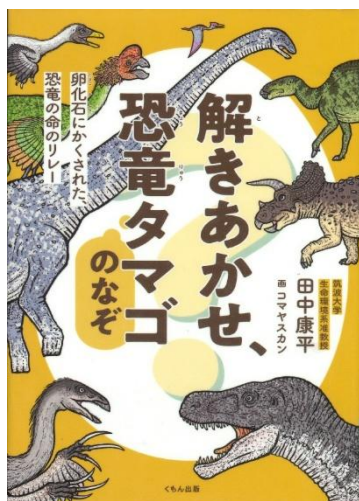


物語部門

## ポケットベアとどろぼうネコ

キャサリン・アップルゲイト/作  
(偕成社)  
93・ア

ネコのゼファリーナは、町にすてられているおもちゃをひろって、リサイクルおもちゃの家〈セカンドチャンス〉のポケットベアにとどけている。ポケットベアはゼファリーナの親友で、おもちゃたちのリーダー的存在の、小さなクマのぬいぐるみ。ある日ゼファリーナは、レストランの裏のごみ箱で、全身がよごれた古いクマのぬいぐるみをひろう。ていねいな言葉で話すこのクマは「ベアワン」と名づけられる。ポケットベアが調べてみると、ベアワンは貴重な世界初のクマのぬいぐるみかもしれない！



ノン  
フィクション  
部門

## 解きあかせ、恐竜タマゴのなぞ

田中 康平/著  
(くもん出版)  
457・タ

子どものころから恐竜や化石が大好きだった田中康平さんは、恐竜の研究者になり、卵化石を研究することにした。恐竜の卵化石にあいた小さな穴の穴あき度を調べ、今生きている鳥の卵とくらべることで、その恐竜がどんな巣でどうやって卵をあたため、子育てをしていたのかということが分かる。好きなことを学び、研究する楽しさが伝わってくる。



物語部門

## バードボーイ

キャサリン・ブルートン/作  
(偕成社)  
93・ブ

心を病んだ母親と都会で暮らしていた12歳のウィルは、母親の事故死をきっかけに、伯父のイアンに引き取られて自然に囲まれた湖水地方に住むことに。誰にも心を開けずにいるウィルだったが、アフガニスタン難民の少年・オマールが明るく話しかけてくれて仲良くなる。日帰りキャンプに参加した二人は、絶滅危惧種のミサゴの巣を見つける。その後もひそかに観察を続けていたが、大雨の夜、巣から落ちたひなをウィルは思わず連れ帰ってしまい…。野生動物との交流を通じ、他者への信頼を取り戻していく物語。



物語部門

## 答えは本の中に

デイヴィッド・レヴィサン/作  
(理論社)  
93・レ

5年生の授業で課題本『冒険者—アドベンチャラーズ』が配られた。ドノヴァンが持ち帰った本を読んだ母親は、ゲイを扱った不適切な本だと学校に抗議する。本は〈ブックチャレンジ〉の審査にかけられ、公開の場で賛否を議論し、授業で使える本か投票で決められることに。ドノヴァンはロベルトとの仲を深めるうち、本を否定した母親を許せなくなっていく。本は、自分の中にあるものに気づかせてくれることがある。大人の決めつけで、子どもたちから本を取り上げてもいいのだろうか。



ノン  
フィクション  
部門

## 新聞記者、伝承者になる！

中塚 慧/著  
(かもがわ出版)  
31・ナ

筆者は朝日学生新聞社に入社後、戦争の特集記事を書いたことをきっかけに、記事という形に制限されず戦争体験を語り継げたらと思うように。記者を続けながら31歳で広島市の被爆体験伝承者の養成研修に応募し、2023年の35歳から伝承者として活動を始める。筆者が体験を引き継いだのは、3歳で爆心地から1.6キロで被爆した清水弘士さん。清水さんの被爆体験は8月6日の後も続く苦しい日々だった…。24年日本被団協のノーベル賞受賞や今世代の平和への取り組みにも触れる一冊。



## 未来へのたからもの

竹内 早希子/著  
(ポプラ社)  
06・タ

2011年の東日本大震災の津波で全壊し、56万点の資料が被災した陸前高田市立博物館。たったひとり生き残った博物館の学芸員、熊谷賢<sup>くまが いまさる</sup>さんは、葛藤しながらも、被災した文化財のレスキューを決意する。県内外の学芸員の仲間とともに、がれきから資料を回収して海水や泥を洗い流し、カビを防ぐ作業を手探りで進めていく。全国の専門機関とも連携し、さまざまな人に支えられて、11年8か月の歳月をかけて再建した博物館の文化財復興物語。